

日本人のルーツを求めて — 蒙古民族 (モンゴロイド) の大移動と歯科人類学 —

花 田 晃 治

(明倫短期大学 歯科技工士学科 教授)

歯・顎の形・大きさなどを歯科人類学的に研究することにより、日本人と同じ蒙古民族が地球上のどこにどれほどいるのか、日本人のルーツはどこか、日本の最新の歯科医療技術、医療器材をこうした蒙古民族に対してどれほど提供することができるのか、文部省科学研究費海外学術調査の目的であった。

ペルーではスペイン人の襲来後、インディオと白人との混血が進んでおり、純粹のインディオはアンデス山脈を東に越えたアマゾン川源流の山岳地帯に住んでいる。科研費で調達した発電機、歯・頭のレントゲン写真撮影装置、現像機、暗室、生体計測器、顔面・口腔内用のカメラ、口腔模型用の器材など、10トンを超す荷物をトラックに積み、おんぼろマイクロバスに乗り込み、ペルーを出発した。

コルディエラ・ブランカの4200mの横腹にある暗く長いトンネルを抜けるとインディオだけの世界に入る。アドベにイチュを載せたインディオの家が土に溶け込むように点在する丘陵地帯。耕して天に至る段々畑。細く険しい山路をひたすら下り、深い谷底にある小さな村、チャビン・デ・ワンタルに着く。そこからラウアパンパ村に一週間通い歯・顎・顔について調査した。

上顎中切歯ではモンゴロイドの特徴である辺縁隆線がよく発達し対称捻転も見られた。対称捻転は中国の漢族、内蒙古自治区の蒙古族、アラスカのエスキモー、アメリカのインディアン、メキシコのマヤインディオにも見られた。切歯のシャベル型と対称捻転だけみても、数万年前に中国大陸にいたモンゴロイドがどのように世界に拡がっていったかがわかる。

国立人類学考古学博物館と天野博物館に所蔵されている古代ペルー人の頭蓋骨と現代インディオとを比較したところ、酷似していた。現代日本人の顔の骨格に近く短頭型で、北米白人の長頭型とは明らかに異なっていた。興味あることは、スペイン人とインディオとの混血であるメスティソの頭蓋の形・大きさが、インディオに近く、北米白人と異なっていた。

ラウアパンパに住むインディオの食物は、大麦、麦、ヒエ・アワなどの穀類、豆類、トウモロコシ、ジャガ

いも、ピーナッツ、芋、かぼちゃ、果物、サトウキビであり、炭水化物と植物性蛋白質だけである。唯一の甘みはサトウキビである。歯磨きの習慣は全くないにもかかわらず、どの歯にもう蝕はない。これは食べ物の中に甘味料がないことによると思われる。そのために乳歯から永久歯への交換がスムーズで、咬合異常は非常に少なく、正常咬合が圧倒的に多い。一方、子供の歯にもすでにプラークがべったりと付いており、歯肉炎が始まっていた。こうした口の中の環境では、う蝕によって歯を失うことはないが、歯周病によって乳歯も永久歯も失われてゆく。同じような形と形質を有している日本人に見られる歯科の三大疾患である、う蝕、歯周病、咬合異常の予防のためにブラッシングが必要なことを強烈に示してくれた。

5年後、メキシコはユカタン半島のオククツカブという小さな村にマヤインディオの調査に出かけた。この人たちも日本人と非常によく似た歯・顔の特徴をしていた。さらに3年後、中国へ調査に出かけた。最も印象に残ったのが万里の長城の外、内蒙古自治区の蒙古族である。歯・顎・顔の形・大きさも、長春、北京、上海、広州などの漢族にくらべて日本人に近かった。

南米、中南米、北米、中国に住むモンゴロイドのルーツは同じではあるが、幾万年もの時代を経て、その地への環境的適応による差違とも思える結果もみられた。しかしながら、我々がこの研究の目的の一つとしてはじめに立てた問、「日本の最新の歯科医療技術、医療器材をモンゴロイドにどれほど提供できるか」についての答えは、歯・顎・顔の形・大きさが同じであるから「イエス」である。